

令和6年度企画展

デジタル考古学

I

おぎのだい

雄城台 遺跡

Oginodai Site

その 時代

Yayoi period



巴形銅器 (大分県指定有形文化財)
雄城台遺跡
(大分県立埋蔵文化財センター蔵)

解説
資料

2024 10.12(土) → 12.15(日)

大分県立埋蔵文化財センター

企画展示室



レキシカくん



マイカちゃん

オリジナルキャラクター



大分県立埋蔵文化財センター

TEL 097-552-0077 FAX 097-552-0700



HP



Facebook



Instagram

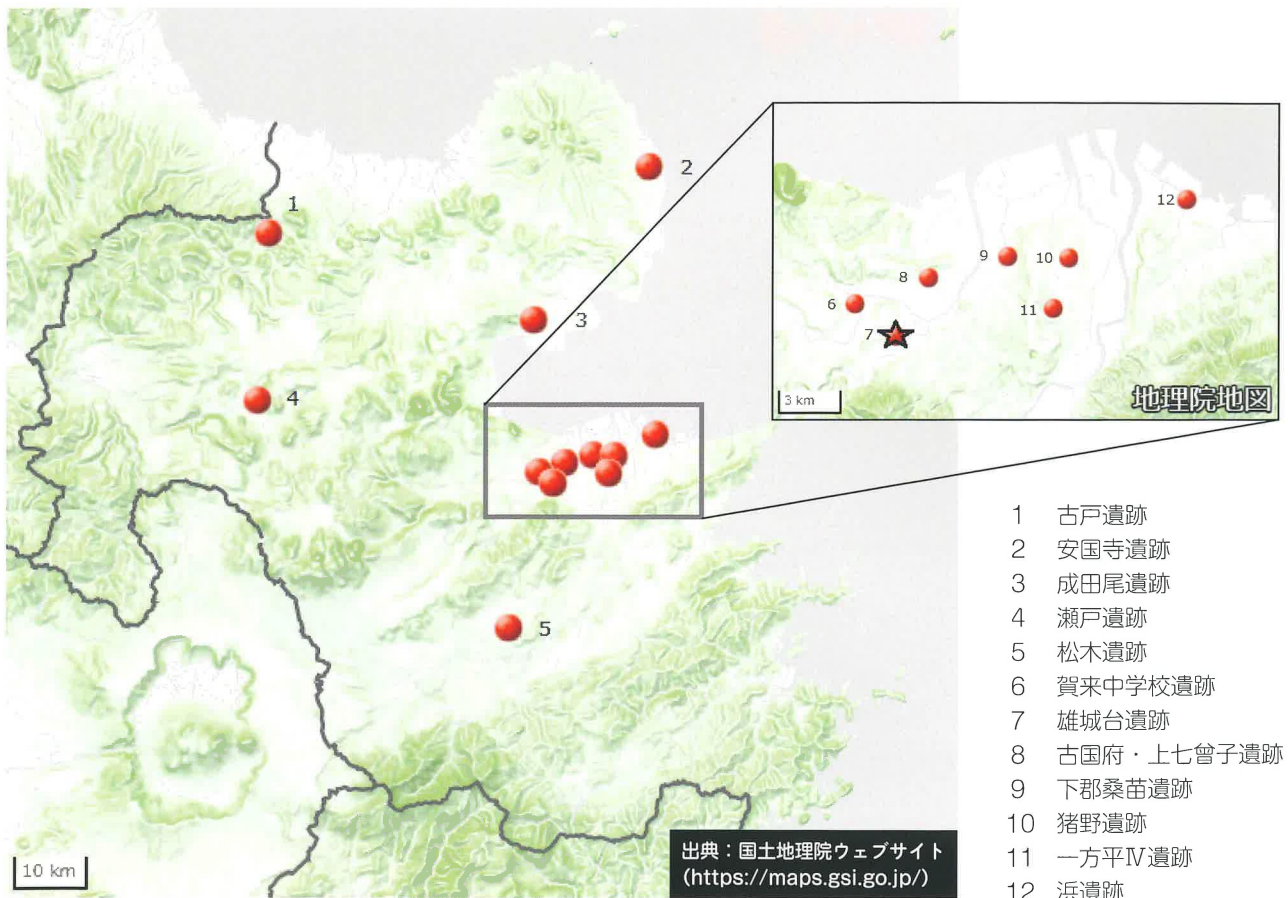
はじめに

昭和46年、当時一面の桑畑だった雄城台で、大規模な発掘調査が始まりました。平成6年まで9次にわたって行われた発掘調査では、中国鏡片の発見、大量の弥生土器の出土、県内唯一の巴形銅器の出土など、大きな成果をあげました。

調査開始から約半世紀が経過し、三次元計測など新たな技術の登場により、考古学の調査・研究は今までにない成果をあげています。

本展では、雄城台遺跡から出土した遺物を中心に、弥生時代の遺跡・遺物を通じて地域の歴史を再発見します。また、「デジタルを活用した文化財保存活用推進事業」の一環で作成した、遺構・遺物の3Dデータを活用し、デジタル技術を使って、今まで見るができなかった遺物のウラ側や当時の人々の暮らしをご紹介します。

●展示に関係するおもな遺跡地図



雄城台遺跡
8次調査の様子

第1章 おおいたの弥生文化

北部九州から始まり、列島の各地に伝わった弥生文化。朝鮮半島からやってきた稲作を始めとする新たな技術や道具・知識は、人々の生活を根幹から大きく変えていきました。地面の下に残る遺跡や、それら遺跡から出土する弥生時代の遺物の数々は、そういった社会の変化を今に伝える貴重な証拠です。

第1章では、県内から出土した弥生時代の土器を中心に、おおいたの弥生時代の様相を紹介します。

弥生早期～前期 (約2800年前～約2500年前)

※弥生時代の開始年代は、紀元前10世紀説や紀元前5世紀説などもあります。

朝鮮半島から伝わった稲作は、現在の福岡県や佐賀県にあたる、北部九州とよばれる地域に定着しました。初めて稲作が伝わったころの遺跡は、大分県内では大分市下黒野遺跡や一方平IV遺跡などがありますが、稲作を行っていたかは分かっていません。その後、弥生時代前期後半ごろから、県内でも徐々に北部九州系の土器や農耕具が出土するようになり、稲作が伝わっていった様子がうかがえます。

大分市下郡桑苗遺跡では、弥生時代前期～中期と考えられる土器と共に、多数の木製農耕具、石器が出土しています。



弥生土器 壺 前8～前7世紀
古戸遺跡 (中津市)



たてきね
竝杵

下郡桑苗遺跡 (大分市)

ちゅうけいのかたばせきふ
柱状片刃石斧

下郡桑苗遺跡 (大分市)

石器を使って
木を切り倒したり、
加工したり
したんだよ



ひらくわ
平鍬

下郡桑苗遺跡 (大分市)

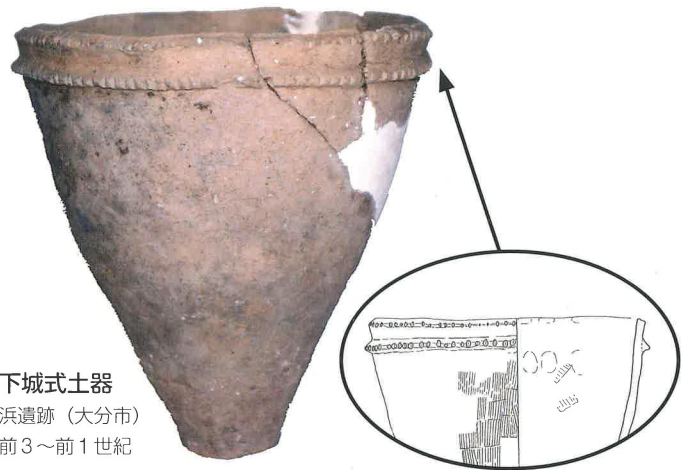


弥生土器 甕 前5～前4世紀
一方平IV遺跡 (大分市)



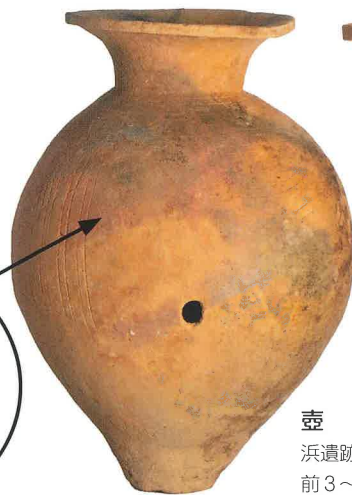
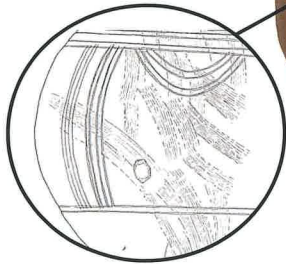
中期 (約2500年前～約2000年前)

おおいたを代表する弥生土器の一つ、下城式土器。佐伯市の下城貝塚を調査した鏡山猛と賀川光夫は、口縁部近くに粘土の帯を巻き付けて、刻み目を入れた土器を発見し、下城式と名づけました。下城式土器は前期末～中期前半にかけて、瀬戸内海沿岸の平野部を中心に広く分布しています。大分市浜遺跡では、表面を丁寧に磨き、顔料を塗って赤く仕上げたものや、意図的に穴をあけたものなど、祭祀に使われたと考えられる土器がまとめて出土しています。



下城式土器
浜遺跡 (大分市)
前3～前1世紀

壺は
模様が入っていて
きれいだね～



壺
浜遺跡 (大分市)
前3～前1世紀



高坏
浜遺跡 (大分市)
前3～前1世紀

石包丁はやっぱり立岩ブランド

石包丁とは、イネの穂の部分を取獲するための道具です。弥生時代中期には、福岡県飯塚市立岩遺跡群^{たていわ}で生産されたもの、いわば弥生時代のブランド石包丁が、北部九州を中心に広く流通しました。

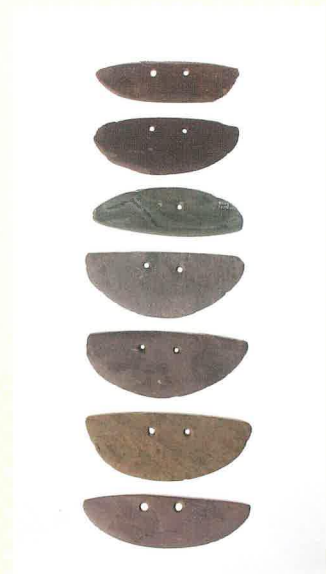
玖珠町瀬戸遺跡では、竪穴建物内から、柱に立てかけるような状況で8個もの石包丁が出土しています。この中にも立岩産石包丁が含まれており、おおいたでもブランド石包丁が使われていたことが分かります。



石包丁出土状況
瀬戸遺跡 (玖珠町)



石包丁
瀬戸遺跡 (玖珠町)

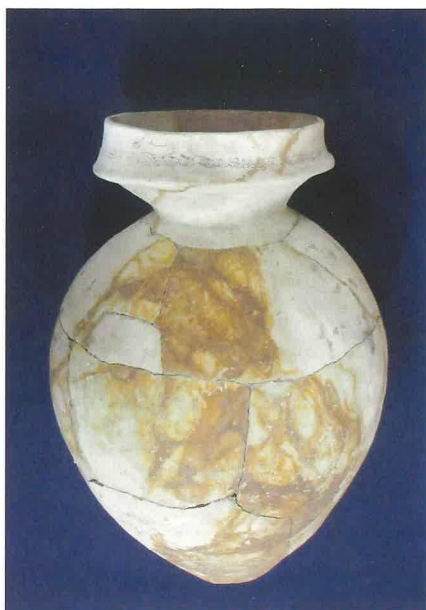


石包丁集合写真
瀬戸遺跡 (玖珠町)

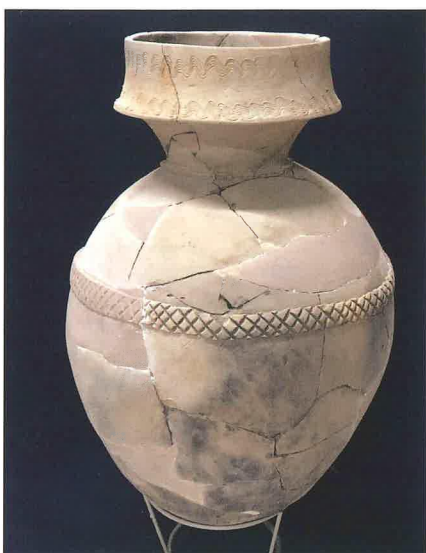
後期 (約2000年前～約1800年前)

安国寺式土器とは、「く」の字に折れた口縁部に、波のような文様をもつ壺のことです。弥生時代後期に国東半島から大野川上流にかけて、のちの「豊後国」に重なるように広く分布していることから、豊後を代表する土器といえます。

安国寺式土器の名前の由来となっている国東市の安国寺遺跡は、弥生時代の集落跡として有名です。安国寺式土器の出土と共に、湿地帯であることから、高床建物の部材や大量の木製農具が出土し、おおいの考古学史上重要な遺跡となりました。



安国寺式土器 1～3世紀
安国寺遺跡 (国東市) 国東市教育委員会蔵



安国寺式土器 1～3世紀
北屋敷ツル遺跡 (由布市)

安国寺集落遺跡 VR体験



360°見回して弥生のムラを体験できるVR映像をYoutubeで公開しています。



【マイブンVR-01】国史跡 安国寺集落遺跡 (大分県国東市)
https://www.youtube.com/watch?v=8ldBik_-_eg

ぼくたちと一緒に
安国寺遺跡を
のぞいてみよう!



ぐるぐる
見回して
みてね～

ミニチュア土器

ミニチュア土器とは、日常で使われる土器に比べかなり小さい土器のことをいい、祭祀に使われたものと考えられています。弥生前期～中期に作られたミニチュア土器は、実際の祭祀土器と同様に、文様を入れていたり、底部に穴をあけたりと丁寧に作られています。後期に作られたものは、手づくねで作られており、壺・鉢・甕などの器種が見られます。

大分市賀来中学校遺跡からは多くのミニチュア土器が出土しており、その出土状況から、水に関わる祭祀が行われたのではと考えられています。



ミニチュア土器(壺)
下郡桑苗遺跡 (大分市)



ミニチュア土器(壺)
賀来中学校遺跡 (大分市)
大分市教育委員会蔵



第2章 雄城台遺跡と人々の暮らし

「雄城台」とは、大分川と七瀬川にはさまれた標高67mほどの台地で、現在は大分雄城台高校が建っています。もともと弥生土器が出土したことは知られていましたが、高校建設に伴う発掘調査により、100基以上の竪穴建物や、集落を取り囲んだとみられる溝が発見され、弥生時代の大きな集落遺跡だということが分かりました。

本章では、発掘調査で出土した遺物から、弥生時代の雄城台での暮らしを「たべる」「つくる」「よそおう」の3つのテーマに分けて考えてみます。

たべる

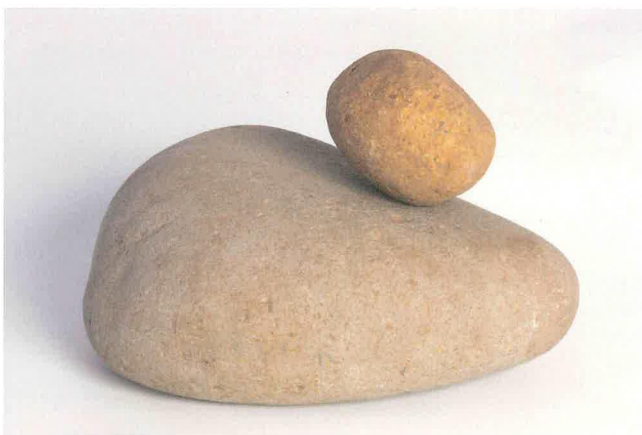
中国の歴史書『魏志』によると、弥生人は米だけでなく、動物の肉や木の実もたべていたようです。

雄城台遺跡からは、米を収穫するための石包丁や、堅い木の実をすりつぶすための石皿と磨石、弓矢のやり、火を起こすための火打ち石などが出土しており、当時の食生活を少しだけうかがい知ることができます。

イチイガシの実は、
いわゆる
「どんぐり」だよ



炭化物(イチイガシ)
雄城台遺跡 (大分市)



すりいし
石皿と磨石
雄城台遺跡 (大分市)



石包丁
雄城台遺跡 (大分市)

つくる

弥生時代、人々は自分たちで使うための道具を手作りしていました。木材を伐採し、加工するために用いられたと考えられる石器や刀子、鉋とみられる鉄器や、それらを研ぐための砥石が出土しています。



へんぺいかた ぼせきふ
扁平片刃石斧
雄城台遺跡（大分市）



といし
砥石
雄城台遺跡（大分市）



ヤリガンナ
雄城台遺跡（大分市）

よそおう

弥生人はどんなよそおいをしていたのでしょうか。残念ながら、人そのものはもちろん、髪や衣服は有機質で、日本の土壌では残りづらいため、ほとんど知ることはできません。しかし、糸を紡ぐための紡錘車や、身に付けたアクセサリーが出土しています。数少なくはありますが、土製の勾玉や、碧玉やガラス製の管玉・小玉が出土しています。これら玉類は、アクセサリーとしてだけでなく、祭祀的な道具としても用いられたと考えられます。



ほうすいしゃ
紡錘車
雄城台遺跡（大分市）



まがたま
土製勾玉
雄城台遺跡（大分市）



管玉・小玉類
雄城台遺跡（大分市）

3D復元 竪穴建物

雄城台遺跡の発掘調査成果を基に、当時の人々が暮らしていた建物の姿を想定し、3Dデータでの復元を試みました。

発掘調査では、床の大きさや柱、炉の痕跡を確認できました。また、弥生時代後期とみられる土器が出土したことから、その頃に使われた建物と分かりました。しかし、柱や屋根など、木でつくられていた建物の部材は残っておらず、建物のつくりまでは分かりません。そこで、県内の遺跡や九州各地の復元事例などを参考に、下村智氏（別府大学名誉教授）・玉川剛司氏（別府大学准教授）の監修のもと、建物の壁や建物の構造を検討し、このような3Dデータを作成しました。

竪穴建物

木造 半地下

雄城台遺跡3次A6号のお部屋

(想定復元)

弥生時代の
おうちを
おじゃまして
みよう!



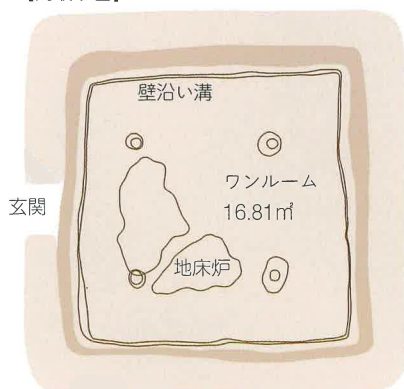
自然と共存するエコハウス

- ◎半地下で一年中快適!
- ◎コンパクトなワンルーム!
- ◎集落中心部の好立地!



※画像は復元途中のもの

【間取り図】



物件概要

間取り…………… 1R
面積…………… 16.81㎡
築年月…………… 弥生時代後期
バス・トイレ…なし
キッチン…………… 地床炉1基
設備…………… 壁60cmほど
壁沿いの溝あり

展示室の
大きな画面で
ぐるぐる
回してみよう

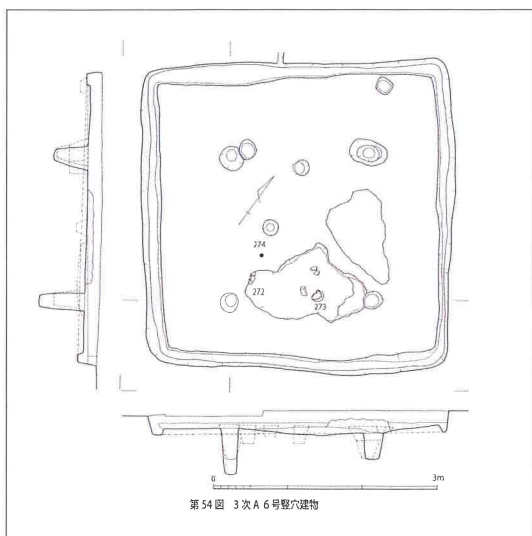


弥生時代の住居

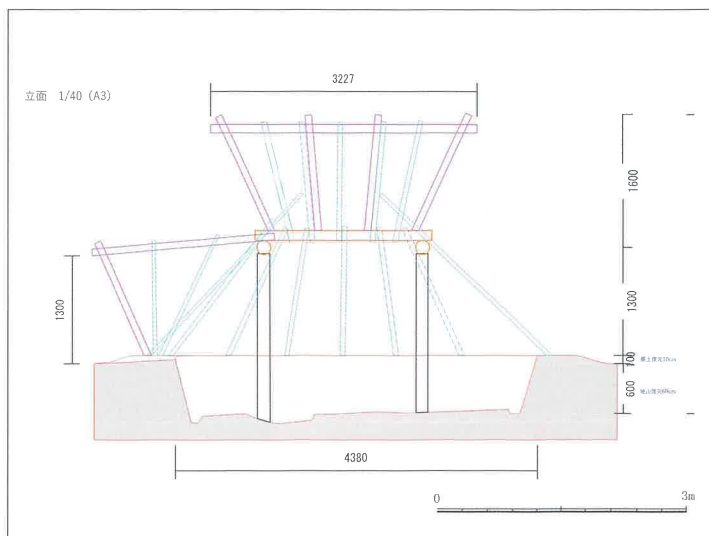
弥生時代の人々は、「竪穴建物」と呼ばれる簡単なつくりの建物に住んでいました。地面を掘り下げて床をつくり、そこに数本の柱を立て、垂木をかけ、ワラやカヤの屋根を乗せます。おおよそ20~30㎡ほどの広さの家に、一家族で暮らしたと考えられています。家の中では食べ物を蓄えたり、火を起こして煮炊きをしたり、夜はぐっすり休んだり、日常生活を送っていました。



建物検出状況
雄城台遺跡（大分市）



遺構実測図
雄城台遺跡（大分市）



復元建物設計図(検討段階)

住居から見つかった鏡片

弥生時代の集落では、住居跡から中国で作られた鏡の破片が出土することがあります。当時の中国鏡は弥生時代中期から後期にかけて北部九州にもたらされたものであり、墓の副葬品として見つかることが多く、権威の象徴として機能していたと考えられます。それら中国鏡は九州から近畿まで広く分布していることから、地域間の交流を通じて大野川流域にもやって来たと考えられます。雄城台遺跡では、墓に副葬するといった風習はなかったため、住居に廃棄されたものと考えられます。



方格規矩鏡

大分市指定有形文化財

雄城台遺跡（大分市）



内行花文鏡

大分市指定有形文化財

雄城台遺跡（大分市）



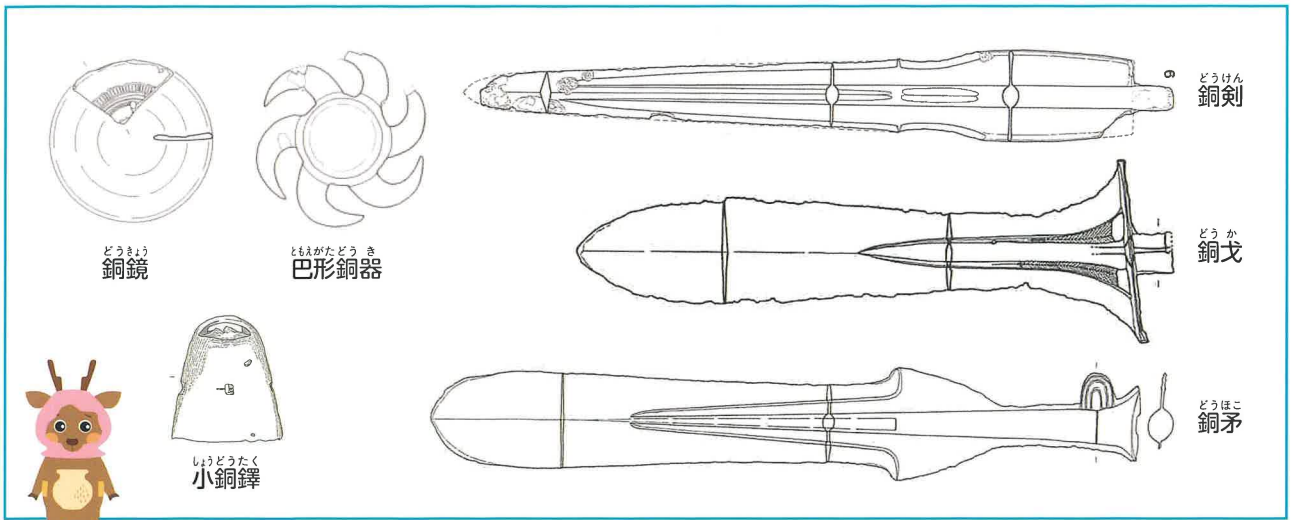
ともえがた どう き 第3章 巴形銅器と青銅器のまつり

弥生時代、稲作などと共に朝鮮半島からもたらされた青銅器。それまで金属を使用しなかった日本列島に、大きな影響を与えました。

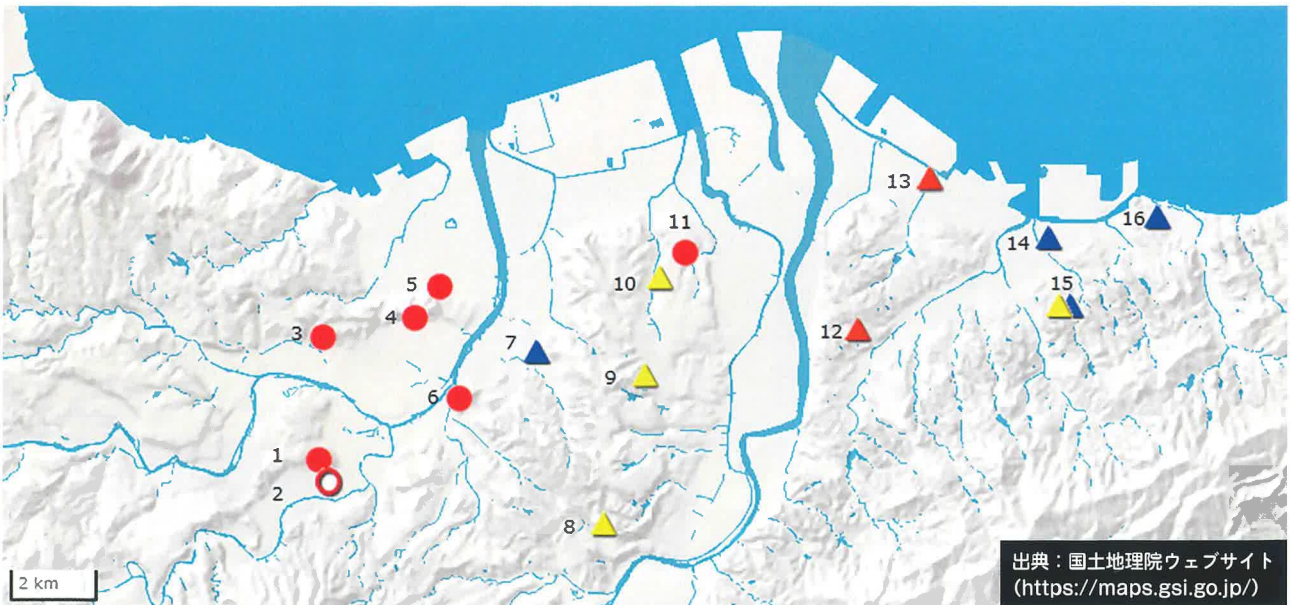
大分県内からも、銅剣や銅矛、銅戈など武器の形をした「武器形青銅器」や、銅鏡、巴形銅器など、さまざまな青銅器が見つかっています。

本章では、雄城台遺跡やその周辺から出土した青銅器から、弥生時代のまつりについてご紹介します。

●さまざまな青銅器



●大分平野周辺の青銅器出土遺跡地図



出典：国土地理院ウェブサイト
(<https://maps.gsi.go.jp/>)

| 凡 例 | |
|-----|-----|
| ● | 中国鏡 |
| ○ | 仿製鏡 |
| ▲ | 銅剣 |
| ▲ | 銅戈 |
| ▲ | 銅矛 |

- 1 雄城台遺跡
- 2 穂田条里遺跡
- 3 尼ヶ城遺跡
- 4 東大道遺跡
- 5 大道遺跡
- 6 守岡遺跡
- 7 岩屋遺跡
- 8 京ヶ尾遺跡
- 9 水分神社遺跡
- 10 猪野遺跡
- 11 地蔵原遺跡
- 12 清水ヶ迫遺跡

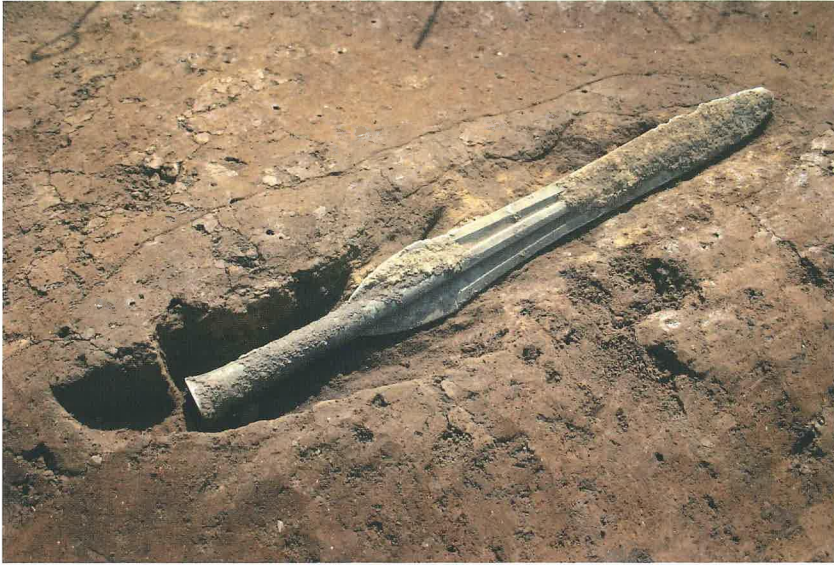
- 13 大在浜遺跡
- 14 松崎遺跡
- 15 名辺山谷遺跡
- 16 細遺跡



どう ほん 銅 矛

矛は、もとは柄を差し込むように取り付けられた武器です。時代が下るにしたがって大型化し、武器としての機能が失われ、祭器として発達していきます。

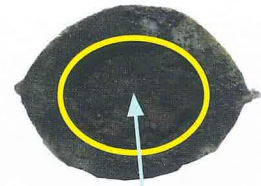
大分県内で出土したとされる銅矛は多く知られていますが、猪野遺跡から出土した銅矛は、発掘調査で埋納の状況が明らかになった貴重な事例です。集落から離れた土坑の中に、斜め約45度に傾けられた状態で発見されました。柄を装着するための袋部の中に、鑄造するための中型がつまっていることから、柄を取り付けず埋納されたものと考えられます。



中広形銅矛 出土状況 前1世紀～1世紀 (大分県指定有形文化財)
猪野遺跡(大分市) 大分市教育委員会蔵
写真提供: 大分市教育委員会

耳

紐を通すための穴が開いておらず、本来の機能が失われています



銅矛袋部

鑄造時の中型が詰まったままで、柄を取り付けた痕跡がみられません

どう か 銅 戈

戈は、刃に対して直交するように柄を取り付けた武器です。銅矛同様、時代が下るにしたがって大型化し、祭器として発達していきます。伝岩屋遺跡出土の銅戈は、出土状況は分かりませんが、当時の記録から現在の滝尾中学校敷地内から発見されたとみられます。住吉神社所蔵の銅戈は、赤色顔料が付着しており、墓の副葬品の可能性があります。この2本の銅戈は、3次元計測を用いた最近の研究で、同じ鑄型で作られた「同範」だということが分かりました。



細形銅戈 前3世紀～前1世紀
(大分県指定有形文化財)
伝岩屋遺跡(大分市) 大分市教育委員会蔵



同じ鑄型で
作られた
双子ちゃん
なんだよ～



細形銅戈 前3世紀～前1世紀
(大分県指定有形文化財)
住吉神社所蔵



巴形銅器

弥生時代後期から古墳時代にかけて作られた小型の青銅器です。円形の座から、4から8本の脚が渦を巻くように伸びた形が、巴文様に似ていることから、巴形銅器と呼ばれます。弥生時代のは全国で40例ほどしかありません。古墳時代のものには、盾に取り付けられた状態で出土した例があることから、魔除けのために使われていたと考えられますが、弥生時代のはそういった事例がなく、出土状況もさまざまであることから、まだまだ謎が多いのが現状です。



巴形銅器 (佐賀県重要文化財)
東宮裾遺跡 (佐賀県) 佐賀県立博物館蔵
写真提供: 佐賀県立博物館



星形(海星形)銅器 (佐賀県重要文化財)
東宮裾遺跡 (佐賀県) 佐賀県立博物館蔵
写真提供: 佐賀県立博物館

平べったくて
小さいものが
古いと考えられて
いるよ



巴形銅器
五丁中原遺跡 (熊本県) 熊本市蔵
写真提供: 熊本市



巴形銅器
(大分県指定有形文化財)
雄城台遺跡 (大分県)

右の2つは
雄城台遺跡のものに
似ているね!



巴形銅器
佐保ソウダイ遺跡 (長崎県) 東京国立博物館蔵
写真出典: ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)



巴形銅器
稲佐津留遺跡 (熊本県)
熊本県教育委員会蔵



巴形銅器

海津横馬場遺跡（福岡県）九州歴史資料館蔵



巴形銅器・有鉤巴形銅器 国重要文化財

桜馬場遺跡（佐賀県）佐賀県立博物館蔵

写真提供：佐賀県立博物館



巴形銅器

新御堂遺跡（熊本県）塚原歴史民俗資料館蔵



脚が上にも
ついているよ
どうやって
作ったんだろう



有鉤巴形銅器 佐賀県重要文化財

桜馬場遺跡（佐賀県）唐津市教育委員会蔵



どんどん大きくなって
脚が増えていったと
考えられているよ～



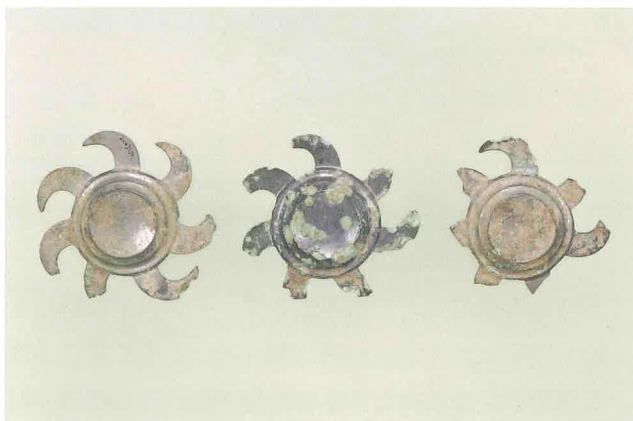
巴形銅器

西山貝塚（広島県）広島大学蔵



巴形銅器 国重要文化財

方保田東原遺跡（熊本県）山鹿市立博物館蔵



巴形銅器

森広天神遺跡（香川県）

写真出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)

東京国立博物館蔵



巴形銅器の作り方

青銅器は、高温に熱して溶かした合金を鑄型に流し込み、冷やし固めて作る「鑄造」という方法で作られています。巴形銅器も鑄造で作られており、実際に使われたとみられる鑄型が見つっています。鑄型は北部九州でのみ見つっており、巴形銅器の多くは北部九州で作られ、各地に伝わったと考えられています。

九州大学筑紫キャンパス遺跡（御供田遺跡）で見つかった鑄型は、香川県森広天神遺跡出土の巴形銅器3つを鑄造した鑄型であることが判明しました。北部九州で作られた巴形銅器が、遠く四国まで運ばれていたことが分かったのです。



巴形銅器鑄型 国重要文化財

吉野ヶ里遺跡（佐賀県）
佐賀県立博物館蔵



巴形銅器鑄型
那珂遺跡（福岡県）
福岡市教育委員会蔵



巴形銅器復元品
(吉野ヶ里遺跡出土鑄型より想定復元) 佐賀県蔵



巴形銅器鑄型
九州大学筑紫キャンパス遺跡（福岡県）
九州大学蔵
写真提供：九州大学



左の鑄型から作られた
巴形銅器！


弥生人が見た青銅器

現在、わたしたちが目にする弥生時代の青銅器は、いずれも青緑色の錆に覆われていますが、弥生時代当時は違った色をしていました。

青銅器の材料である青銅とは、銅を主成分に、^{すず}錫や鉛などの金属を混ぜた合金のことで、その色や性質は金属の比率によって変化します。^{すず}錫が多いと銀色に近づき、固く脆くなります。一方、銅が多いとその色は赤銅色に近づいていき、柔らかく粘りを持つようになります。巴形銅器が作られた弥生時代後期は、中国由来の材料を輸入していたと考えられており、重量比で銅が80パーセント以上を占め、次いで^{すず}錫、鉛を含む合金であったと考えられています。色復元品を見てみると、当時の青銅器は金色に近い色をしていました。初めて青銅器を目にした弥生人たちは、金色の青銅器のきらめきに神秘的な力を感じ、祭祀に用いたのかもしれませんが。



●青銅器の成分による色の変化



| | | | | | |
|----------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 銅 | 95% | 90% | 80% | 70% | 65% |
| すず 錫 | 0% | 5% | 15% | 25% | 30% |
| なまり 鉛 | 5% | 5% | 5% | 5% | 5% |

銅剣レプリカ(色見本品)
個人蔵 現代

●おもな参考文献

- 岩永省三 1980 「弥生時代青銅器型式分類編年再考—剣矛戈を中心として—」
『九州考古学』55号 pp.1-22 九州考古学会
- 岩永省三 1997 『歴史発掘7 金属器登場』講談社
- 岩本 崇 2017 「古墳出土巴形銅器の系譜と成立」『山本暉久先生古稀記念論集 二十一世紀考古学の現在』
- 川北奈美 2018 「巴形銅器からみた弥生・古墳社会の特質—変革期に着目して—」『三重大史学』18
- 佐藤由紀男編 2015 『考古調査ハンドブック12 弥生土器』ニューサイエンス社
- 武末純一 2004 「弥生時代前半期の暦年代—北部九州と朝鮮半島南部の併行関係から考える—」
『福岡大学考古学論集—小田富士雄先生退職記念—』
- 武末純一・森岡秀人・設楽博己
2011 『列島の考古学 弥生時代』
- 田尻義了 2012 『弥生時代の青銅器生産体制』九州大学出版会
- 田尻義了 2024 『青銅器の生産からみる弥生社会』雄山閣
- 藤尾慎一郎 2015 『弥生時代の歴史』講談社
- 宮本一夫 2009 『農耕の起源を探る イネの来た道』吉川弘文館

●協力

文化庁、東京国立博物館、香川県、福岡県教育委員会、佐賀県、熊本県教育委員会、福岡市教育委員会、唐津市教育委員会、熊本市、熊本市教育委員会、山鹿市教育委員会、国東市教育委員会、大分市教育委員会、豊後大野市教育委員会、九州大学、広島大学、別府大学、大分県立歴史博物館

本書掲載の写真は、所有者から提供を受けたもの以外は所有者の許可を得て撮影したものです。
掲載資料のうち、所有者の記載がないものは大分県立埋蔵文化財センターの所蔵品です。

